日小整会誌（J Jpn Ped Orthop Ass）15(2)：220, 2006.
第16回日本小児整形外科学会学術集会　主題III

脳性麻痺児の療育における整形外科医の役割

座長：岩　谷　　力・小　田　　浤

脳性麻痺児の病態，障害構造は複雑化し，単に運動障害を持つ肢体不自由児ととらえることはできなくなり，他領域専門職とのチームアプローチの時代をむかえ，整形外科医の果たすべき役割が不明確になっている．施設の見直し，在宅，普通校での統合教育が進むなかで，脳性麻痺児への医療支援が後退しているのではなかろうか．脳性麻痺児の障害の中核をなすものは，運動障害である．中枢神経系の機能障害に基づく身体運動の異常により，動作の発達が遅れ，生活習慣，知識の習得，社会生活能力の獲得が遅れているこども達ととらえ，これらの過程が併存する知的障害により複雑化するとモデル化することにより，脳性麻痺児の療育をup to dateなものにできないものであろうか．療育に関係する整形外科医はすでに運動器の問題から運動・動作・生活習慣の問題に視点を移しているが，学問としての整形外科にはなじみの少ない分野であり，若い人材を引きつけることができなくなっている．

療育の目的は，病気の治療にとどまるものではなく，社会生活能力を身につけることである．今回は，重症児を対象とするのではなく，比較的軽症から中等症で成人してから福祉工場，授産施設における社会参加が可能と考えられる能力をもつ脳性麻痺児を対象として，共生社会において，社会の一員として生き生きと生活できる人として育てるために，家庭，こども病院，肢体不自由児施設，学校において整形外科医の活動を通して，我々の果たすべき役割を再確認し，これからを展望したい．